

アスターの少量土壌培地耕における培地量の削減				
【要約】アスターの少量土壌培地耕においてプランターあたりの培地量を慣行の10Lから7Lまで削減しても、加工向けに十分な品質の切り花を収穫できる。				
農業技術振興センター・花・果樹研究部・花き係		【実施期間】	平成29年度～令和元年度	
【部会】 農産	【分野】 戦略的な生産振興	【予算区分】	県単	【成果分類】 指導

【背景・ねらい】

アスターは花形・花色が豊富で用途が多様なことから、農産物直売所や花束加工業者から関西仏花や組花加工向けに生産を強く求められており、より低コストで栽培することが重要である。しかし、アスターの少量土壌培地耕では、購入培土（1 m³：35,000円程度）の使用を基本としているためにコストがかかっている。そこで、コスト低減を目的に培地量を削減させたアスターの少量土壌培地耕栽培について検討する。

【成果の内容・特徴】

- ① 切花長について、培地量を慣行の10Lから7L、5Lに削減すると、「あずみホワイト」と「あずみライトブルー」で短くなるが、「ステラホワイト」と「ステラディープブルー」では、その傾向は明らかではない（図1）。
- ② 切花重（草丈65cm、下位20cm脱葉）については、5Lの培地量では、7Lと10Lの場合に比較して、「あずみホワイト」「あずみライトブルー」で軽くなるが、「ステラホワイト」と「ステラディープブルー」では、その傾向は認められない（図2）。
- ③ 可販率（切花長65cm以上、且つ切花重20g以上の割合）は、培地量を7Lに削減しても全ての供試品種で80%以上を確保できる。（図3）。
- ④ 培地量を5Lまで削減すると品種、条件によっては切花長、切花重が小さくなり、可販率が大きく低下することから、培地はプランターあたり7Lまでの削減が適当である。

【成果の活用面・留意点】

- ① 播種時期は4月中旬、定植時期は5月中旬とし、定植は発泡スチロール製プランター（外径74.5×24×14cm）に配合培養土（赤玉土（小粒）5：ピートモス2：バーク堆肥2：パーライト1）を充填し、プランターあたり18株を定植する。
- ② 給液はEC0.75mS/cmの養液を1回当たり300mlで生育に応じて1日3～6回施用する。
- ③ 培地量を削減すると保水力が低下するため、特に高温となる生育後半はプランターあたりの給液量を天候に応じて調節する必要がある。
- ④ 2019年の6～7月は平年と比べて気温が低く、曇天の日が多かったことから、2019年は2018年と比べて切花長、切花重、可販率が劣る傾向があった。

[具体的データ]

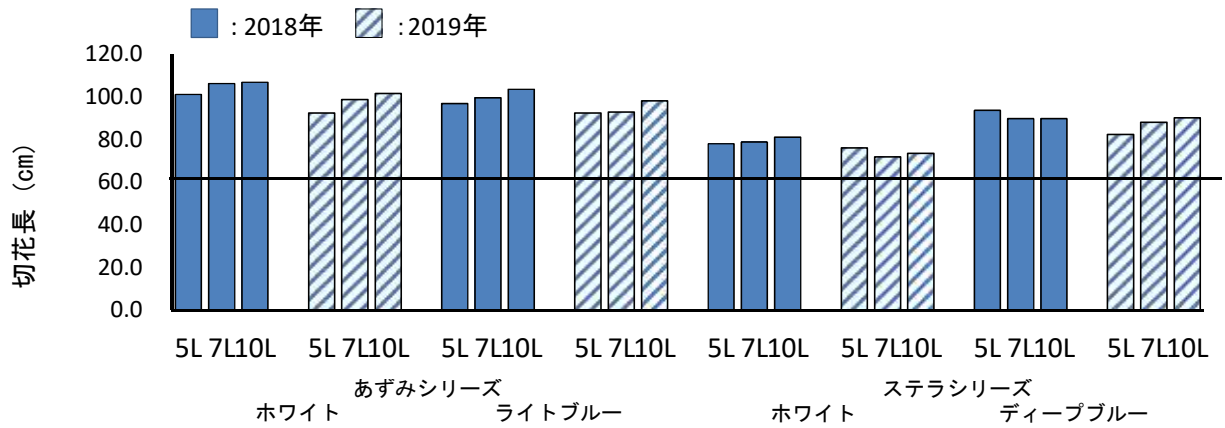


図1. 培地量と切花長の関係

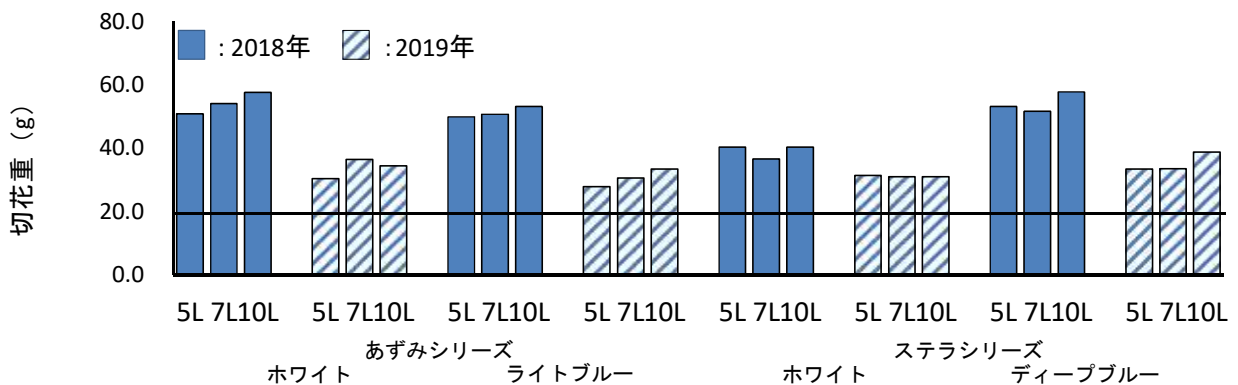


図2. 培地量と切花重の関係

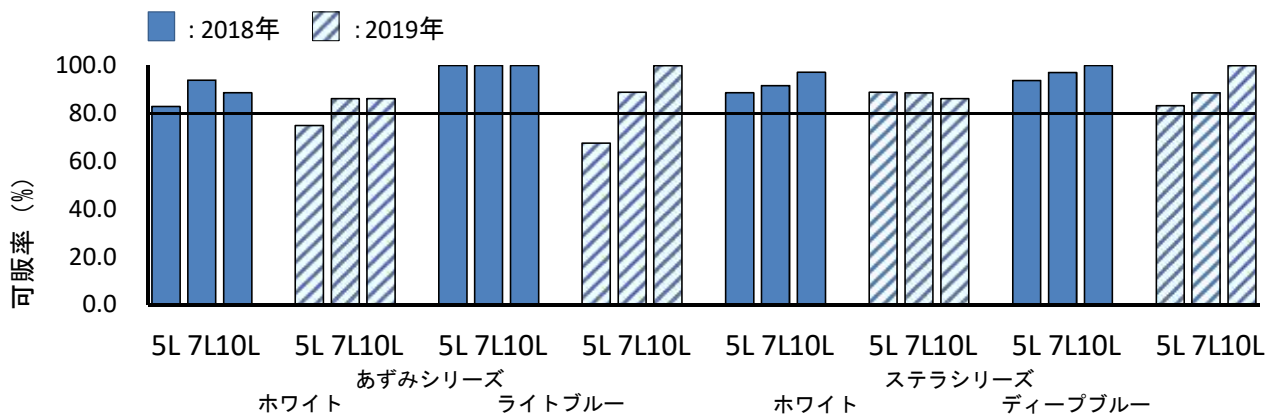


図3. 培地量と可販率の関係

[その他]

- 研究課題名

大課題名：戦略的な農畜水産物の生産振興に関する研究

中課題名：野菜等園芸作物や近江の茶の生産振興

小課題名：関西仏花および組花加工向け花材の栽培方法の確立

- 研究担当者名：籠 洋 (H30～R1)、今井 俊行 (H29)、北村 治滋 (H29～H30)、野 雄大 (R1)

- その他特記事項：